

平城京右京三条一坊八坪の調査（平城第448次）

いよいよ平城遷都1300年祭の開催も近づいてきましたが、現在榊積水化学奈良工場にあるグラウンドの中に、平城京歴史館（仮称）なる展示施設が建てられることになりました。そこで、その事前調査として、今年の1月から3月にかけて発掘調査がおこなわれました。調査面積は約1,100㎡です。

まず、グラウンドの盛土と旧耕作土を除去したところ、調査区中央において護岸杭列をとまなう池の痕跡を検出しました。この池の中からは大量の建築廃材とともに、看板や葉莢などの米軍に関連する遺物も出土しました。

調べてみますと、この池は1929年にこの地に設けられた奈良地方競馬場に関連する施設である可能性の高いことがわかりました。奈良地方競馬場は1940年に現在の奈良競輪場へと移設され、その後、太平洋戦争中には興亜機械工業なる軍需工場が建設されていたようです。そして終戦後、軍需工場を米軍が接収し、当該地にグラウンドを敷設しました。したがって、この池から出土した廃材は興亜機械工業の建築廃材と考えられ、基地施設を造営した米軍によって投棄されたものと考えられます。

この池が造られた影響を受け、調査区内で検出された奈良時代の遺構は、調査区東側と北側にかろうじて残っているという状況でした。

調査区東側では、南北15m、東西5mにわたるL字状の溝とその周囲に広がる瓦溜まりを検出しました。L字状の溝の内外では整地の状況が異なってお

り、内側の整地土には瓦が多く含まれています。そして、溝の内側では柱穴などの遺構は検出されませんでした。様々な状況から類推すると、これは基壇建物の痕跡を示している可能性が高く、溝は基壇外装の抜取痕であり、内側の整地土が建物基壇の積土に相当すると考えられます。柱穴などの痕跡が見つからないのは、基壇そのものが大きく削られてしまったためでしょう。

調査区北側においても、東西20m以上にわたって瓦溜まりが検出されました。調査区東側の瓦溜まりに比べると土器の出土量が多く、両者に若干の差異が認められます。瓦溜まりの下層からは遺構の痕跡が見つかりませんが、瓦溜まりの範囲から想定すると、この北側に何らかの建物が存在しており、その建物が壊されたときに瓦溜まりができたのだでしょう。

これらの箇所出土した瓦の年代から、今回検出した遺構は奈良時代後半のものと考えられます。そこで、その下層に存在するであろう奈良時代前半の遺構面についても調査しましたが、下層からは地山となる砂層が検出されるにとどまり、明確な遺構面は確認できませんでした。したがって、この地における奈良時代前半の状況については不明と言わざるを得ません。

今回の調査では奈良時代だけではなく、奈良市の近代史にまつわるデータを得ることができました。それこそ、1300年間にわたる歴史の流れを垣間見た思いです。（都城発掘調査部 林 正憲）



平城第448次調査区全景（西から）



調査区東側の瓦溜まり（北から）